

Glenn's の彼方へ
—Cooper の救い—

肴 倉 宏

Beyond Glenn's Cave
—Cooper's salvation—

Hiroshi Sakanakura

抄 録

自然とそれを覆う闇は、*The Last of the Mohicans* を構成する重要な要素であるだけでなく、作品のテーマを支える重要な意味をも与えられている。自然と闇は、それぞれ、善と悪を象徴的に示している。悪に苦悩している Natty Bumppo は、救いを求めて Glenn's の洞窟に行くのである。しかし、彼は、そこで語られているキリスト教信仰に失望する。その結果、彼は、Glenn's の洞窟を出て霊的戦いを続けようと決心する。彼は、Uncas をメシヤと認識するだけでなく、彼の死に象徴的な意味をも読み取るのである。Uncas の死は、Natty Bumppo と Uncas の父 Chingachgook との絆を深めている。Natty Bumppo は、救いを得たのである。

キーワード：ジェームズ・フェニモア・クーパー、「モヒカン族の最後の者」、ナッター・バンポー
(1995年9月1日 受理)

Abstract

The contrast between nature and the darkness covering it constitutes both structural and thematic frames for *The Last of the Mohicans*. Nature symbolizes good while the darkness symbolizes evil. Natty Bumppo who suffers from evil goes to the Glenn's cave to seek salvation, but he is disappointed with Christian faith preached there. As a result, he decides to go out of the cave to continue his spiritual struggle. He understands Uncas as a Messianic person and sees Uncas' death as symbolic of atonement. Uncas' death strengthens and deepens the relationship between Natty Bumppo and Chingachgook and Natty Bumppo is reconciled with God.

Keyword: James Fenimore Cooper, *The Last of the Mohicans*, Natty Bumppo

(Received September 1, 1995)

Kay Seymour House は、*The Last of the Mohicans* (1826) の Natty Bumppo を古代の哲学者の生きざまに近い信条をもっている人物と見做している。House は、Natty Bumppo について次のように述べている。

Whatever the reason, Natty and the Indians, with their devotion to ataraxia and their dedication to personal standards of honesty and friendship, gain in credibility through their Epicureanism, which strikes us as both strange and hauntingly familiar.⁽¹⁾

House は、Natty Bumppo や彼と共にいる Uncas と Chingachgook たちが周りで起こる事柄に惑わされず心の平静不動に幸福を見いだす人物であるという。House は、Natty Bumppo をエピクロス主義者であるというのである。

しかし、Natty Bumppo を闇に覆われた舞台の中で捉え直してみるとどうなるであろうか。Natty Bumppo を闇に覆われた舞台の中で捉え直してみると、そこには象徴的な意味を与えられた新しい人間像が浮かび上がってくるように思えるのである。そして、*The Last of the Mohicans* の最初の3章が、重要な意味を持つてくるように思えるのである。

Cooper は、最初の3章で Natty Bumppo に与えた意味を明らかにするために必要な準備をしている。まず重要なのは、物語の舞台を設定することである。雄大な自然が読者の眼前に展開する。Cooper は、第1章の冒頭で自然との戦いが敵対するもの同志の戦いに先立つと述べている。続いて、Cooper は、対決する英・仏両軍の大部隊が広大な森林に飲み込まれている様子を描いて “the forest. . . appeared to swallow up the living mass which had slowly entered its bosom.” (15)

と述べている。⁽²⁾ 敵・味方両軍を飲み込んでしまう自然の広大さが強調されているのである。

Cooper は、自然の物理的な広大さを強調するだけでない。彼は、自然が象徴的な意味も与えられていることを示そうとする。Howard Mumford Jones は、Cooper のパノラマ的な自然描写が Hudson River School に属すると言われている画家たちの自然描写と共通していることを指摘した上で、両者が描こうとしたことは、“the grandeur of God working in the universe”⁽³⁾ であると述べている。Cooper は、神が自然を通して自らを啓示するということを示そうとしたのだ。従って、Cooper の描く自然は、それを見る者の心の中に “the awe or humility”⁽⁴⁾ をもたらすものなのだ。Cooper の描く舞台を構成する自然は、宗教的な意味を持つ信仰の対象とされるものなのである。

神の啓示としての Cooper の自然は、同時に作品の舞台を構成するもう一つの重要な要素である死と闇の覆うところでもある。それは、英・仏両軍が植民地支配の覇を競いあって死闘を繰り広げている “the bloody arena” (12) でもあるのだ。そして、死体が累々と続く森林地帯は、闇に包まれている。Cooper は、森林地帯を “an impervious boundary of forest” (11) や “the interminable forests” (13) と描き、森の中は光を通さず昼なお薄暗いという。Cooper の作品には、物語が夕方から始まって夜へと進むものが多い。*The Last of the Mohicans* でも冒頭の残照がすぐさま夜の闇にかき消されてしまうことで、森の中はより一層暗さを増す。この点について、Thomas Philbrick は、“almost always Cooper's protagonists are hemmed in by darkness, mist, or the cover.”⁽⁵⁾ と述

べている。闇に包まれ死体の転がる森は、まるで墓場のような不気味な様子をしているのである。

Cooper は、死臭を漂わす闇を一人のインディアンと結び付けて描いている。読者は、このインディアンの名前が Magua であると知らされるのだが、彼は物語が始まるとすぐに大自然の舞台に登場するのである。夕暮れに Edward 砦に “the unwelcome tidings” (17) をもって現れたこのインディアンは、これからすぐに訪れる不吉な闇の前触れなのである。Cooper は、この男と闇の結び付きを強調する。この男の表情は、闇のように暗い。そればかりか、Magua の表情の暗さは、見る者にただならぬ嫌悪感すら与えている。Cooper は、彼の表情を次のように描いている。

The colours of the war-paint had blended in dark confusion about his fierce countenance, and rendered his swarthy lineaments still more savage and repulsive, than if art had attempted an effect. (18)

Cooper は、Magua の暗さが顔にぬった絵の具の効果だけによるものではないという。こうして、Cooper は、Magua の表情に浮かぶ暗さがこの男の本質に根ざしていることを暗示している。

Cooper は、物語の進行につれて Magua の本質を読者に明らかにする。そして、彼は舞台を包む闇の性質を明らかにしてゆくのである。Magua は、倫理的に墮落したインディアンとして描かれている。彼は、白人と接触し “the fire-water” (102) を飲むことを覚え、“a rascal” (102) になり下がったのだ。文明と接触し宗教的な意味を与えられている自然との関係を失ったことが、彼の墮落の原因

なのである。やがて、Magua は、大虐殺を引き起こした首謀者として読者の前に現れる。第17章の William Henry 砦の虐殺の場面は、イギリス軍の将兵とともに婦人や子供までがインディアンに殺された歴史的に有名な事件である。Cooper は、この事件と Huron 族を結び付ける。Huron 族が大量殺戮を行ったのだと言う。そして、Cooper の Magua は、Huron 族を操って彼等にイギリス軍の将兵と婦人や子供を襲撃させ虐殺させたのである。森林地帯に転がる死体は、血に飢えた Magua の暗躍の結果なのである。Magua は、“the dusky savage the Prince of Darkness, brooding on his own fancied wrongs, and plotting evil” (284) なのである。Magua は、悪の化身なのだ。大自然という舞台は、倫理的腐敗を隠蔽し悪の跳梁を許す象徴的な意味を帯びた闇に覆われているのである。

Cooper は、まず初めに物語の舞台を設定した。宗教的な意味が与えられた自然は、背後におしやられその表面を倫理的腐敗を隠す闇が覆っている。Magua が君臨する舞台は、James Franklin Beard がいうように “his [man's] fallen state”⁽⁶⁾ なのである。こうして、Cooper は、これから闇に覆われた舞台で起こる事柄にまつわる問題の中心が悪の認識に関するものであることを暗示するのである。

Natty Bumppo が倫理的腐敗を隠し悪の跳梁を許す闇に覆われた舞台に登場する。彼は、猟師をして生計をたてている男なのだが、戦争中の今イギリス軍の斥候として働いているのである。彼は、Edward 砦と William Henry 砦の間に横たわる広大な森林地帯で敵のフランス軍の動向を探ろうとしているのである。そこに、Alice と Cora Munro

を William Henry 砦まで護衛してゆこうと
している Duncan Heyward が来るのであ
る。Duncan は、道案内の Magua が道を間
違えたようなので砦まで案内して欲しいと頼
むのである。自然に慣れ親しんでいるイン
ディアンが道を間違えるはずがないと思っ
ている Natty Bumppo は、不審に思いそのイン
ディアンの部族を Duncan に問いたです。
Magua が Huron 族であると分かると、
Natty Bumppo は、Duncan に次の様にい
う。

A Huron! . . . they are a thievish race,
nor do I care by whom they are a-
dopted; you can never make any thing
of them but skulks and vagabonds.
(37)

Natty Bumppo は、Huron 族を倫理的に腐
敗した連中と見ているのである。彼は、
Huron 族の一人である Magua をまだ見て
いないのだけれども全く信用できない男と判
断するのである。

Natty Bumppo は、自分の目で見て
Magua がどのような男か確かめようとす
る。彼は、眼光鋭い人として描かれている。
Cooper は、Natty Bumppo の目を次のよう
に描いている。

The eye of the hunter, or scout, which-
ever he might be, was small, quick,
keen, and restless, roving while he
spoke, on every side of him, as if in
quest of game, or distrusting the
sudden approach of some lurking
enemy. (30)

Natty Bumppo は、常に用心深く辺りを見回
しているのである。彼の鋭い目は、彼の仕事
に不可欠なものである。しかし、彼の目は、
職業的な特徴を表すだけでなく象徴的な意味

も与えられている。それは、悪の跳梁する闇
の中で善・悪を識別できる洞察力を与えられ
ていることを示している。実際、Natty
Bumppo は、“a look so dark and savage,
that it might in itself excite fear” (39) と描
写された邪悪な Magua を一目見ただけで、
彼は、“I knew he was one of the cheats as
soon as I laid eyes on him!” (39) というの
である。彼は、Magua を計り知れないほどの
倫理的腐敗と破壊のエネルギーをうちに秘め
た男と見抜くのである。彼は、Magua を悪の
化身と認識するのである。

Magua を悪の化身と認識する Natty
Bumppo は、倫理的腐敗を隠し悪の跳梁する
闇の中で自分の姿を顧みるのである。Natty
Bumppo は、William Henry 砦まで案内し
てくれと Duncan に頼まれるのだ。しかし、
彼は、Duncan に次の様にいう。

'Tis a natural impossibility! . . . I
wouldn't walk a mile in these woods
after night gets into them, in compa-
ny with that runner [Magua], for the
best rifle in the colonies. They are full
of outlying Iroquois, and your mon-
grel Mohawk knows where to find
them too well, to be my companion.
(39)

Natty Bumppo は、Duncan たちを William
Henry 砦まで案内することができないとい
う。彼は、悪が跋扈する倫理的な闇の中で人
を導く力を生まれながらに持ち合わせていな
いというのである。彼は、倫理的善・悪を識
別する洞察力を持っているけれども、悪の潜
む闇の中で Duncan たちを安全に砦まで案
内できないと謙虚に認めるのである。彼は、
不完全な人間であることを告白しているの
である。

不完全な人間 Natty Bumppo の姿は、さらに強調されている。猟師である Natty Bumppo は、射撃の腕を誇りにしている。射撃の腕を誇りとしている Natty Bumppo は、Magua にけがをさせ捕まえようとする。そして、彼は、鉄砲を撃つのだ。その直後に、彼は、鉄砲を撃ったことを反省して次の様にする。

It was an unthoughtful act, in a man who has so often slept with the war-whoop ringing in the air, to let off his piece, within sound of an ambushment! But, then it was a natural temptation! 't was very natural! (45)

Natty Bumppo は、インディアンが待ち伏せしているかもしれない森の中で鉄砲を撃ったことを反省しているのだ。彼は、撃つべきでないのに撃ってしまったのである。彼の射撃の腕に対する自信が、自分の能力に対する過信を生みかえって過ちを犯させてしまったことを認めているのである。彼は、生まれながらに誘惑に陥りやすい人間であることを認識しているのがある。彼は、悪に蝕まれている自分の姿を自覚しているのである。彼は、Magua を悪の化身と認識すると同時に自分も Magua と同質の悪に蝕まれ人間性を荒廃させられている人間であることを自覚しているのである。

悪に蝕まれていることを自覚している Natty Bumppo は、Glenn's の洞窟にゆくのである。Glenn's の洞窟は、Cooper が *The Last of the Mohicans* を書くきっかけを与えられた場所として重要である。⁽⁷⁾ 彼は、*The Last of the Mohicans* を出版する2年ほど前の1824年8月に数名のイギリス人と Glenn's の洞窟に観光旅行をし、そこでの話し合いがきっかけとなって作品を書いたのである。

Glenn's の洞窟は、創作のきっかけを与えられた場所として重要であるだけではない。さらに重要なことは、Glenn's の洞窟が象徴的な意味を与えられていることである。Natty Bumppo が、Glenn's の洞窟に行くとき Duncan にさせた約束に注目してみる。彼は、次のようにいって Duncan に二つのことを約束させる。

The one is to be still as these sleeping woods, let what will happen; and the other, is to keep the place where we shall take you forever a secret from all mortal men. (46)

Natty Bumppo は、ひとつの約束は静かにすることという。続けて、彼は、もう一つの約束は Glenn's の洞窟のことを誰にも喋らず永遠に秘密にしておくことという。これから Natty Bumppo が Duncan や David そして Alice と Cora Munro 姉妹を伴ってゆく Glenn's の洞窟は、人に知られてはならない神聖なところであることが暗示されているのである。

Glenn's の洞窟に与えられている象徴的な意味は、第6章の冒頭の場面を通してさらに強調されている。Glenn's の洞窟にたどり着いた Natty Bumppo は、Duncan たちにたいまつをかがげて洞窟の内部を照らし出させて見せるのだ。彼のかかげる明かりの中にくっきりと浮かんで見えるのが、Uncas の姿なのである。Uncas は、メシヤなのである。⁽⁸⁾ メシヤである Uncas の姿は、Glenn's の洞窟にたどり着いた全ての人の前に示されるのである。メシヤ Uncas の姿が啓示される Glenn's の洞窟は、宗教的な意味を与えられた神聖な場所なのである。悪に蝕まれていることを自覚している Natty Bumppo は、宗教的な意味を与えられている場所にやってきた。その

ことは、彼が悪の呪縛から解放され魂の負っている傷を癒されることを願っていることを物語っている。Glenn'sの洞窟に来た Natty Bumppo は、救いを求めている人物なのである。

Natty Bumppo は、Glenn'sの洞窟で初めて David Gamut と話をする。David が賛美歌教師であることを知ると、Natty Bumppo は彼に礼拝をしてくれるように頼むのである。David は、Natty Bumppo に答えて次の様にいう。

With joyful pleasure do I consent. . .
What can be more fitting and consolatory, than to offer up evening praise after a day of such exceeding jeopardy! (58)

David は、一日の難を逃れ得たことを感謝して賛美歌を歌うのである。続けて、彼は、“He that is to be saved will be saved, and he that is predestined to be damned will be damned! This is the doctrine of truth, and most consoling and refreshing it is to the true believer.” (116) と厳かに説教する。彼は、予定説を真理の教えと信じているのである。David を支えるキリスト教信仰は、敬虔な宗教感情と教義から構成されているのである。ところが、David は、Glenn'sの洞窟で啓示されるメシヤ Uncas に全く関心を示さないのである。Cooper は、David の様子を次のように描いている。

The stranger [David] alone disregarded the passing incidents. He seated himself on a projection of the rocks, whence he gave no other signs of consciousness, than by the struggles of his spirit, as manifested in frequent and heavy sighs. (52)

David は、Uncas よりも殺された馬のことを悲しんでいるのである。彼は、Uncas をキリスト教の福音を知らないインディアンと見ているのである。彼の布教しようとしているキリスト教信仰は、敬虔な宗教感情と教義を中心にしてはいるけれどもメシヤ認識を欠いているのである。⁹⁾

Glenn'sの洞窟に救いを求めてきた Natty Bumppo は、David の説くキリスト教信仰に批判的なのである。Natty Bumppo は、David が予定説を説くのを聞くと “Doctrine, or no doctrine. . . 'tis the belief of knaves, and the curse of an honest man!” (116) という。彼は、予定説を悪党の信仰と批判するのである。その上、彼は David の歌う賛美歌に対しても批判的なのだ。実際、彼は、ところ構わず賛美歌を歌う David に “Throat and Iroquois” (118) という。彼は、大声で賛美歌を歌えば闇の中に潜んでいるインディアンに居場所を教えることになり危険を招くというのである。Natty Bumppo は、メシヤ認識を持たず敬虔な宗教感情と教義を重視する David のキリスト教信仰に心を満たすものを感じられないのである。

Natty Bumppo は、Glenn'sの洞窟で Duncan Heyward と語り合うのである。Duncan は、若くして “the Royal Americans” (38) の少佐に抜擢された南部出身のエリートなのである。彼は、Natty Bumppo に “a soldier in his knowledge, and a gallant gentleman!” (38) と言われている知識人なのである。インテリの Duncan は、Glenn'sの洞窟を砦のイメージを用いて表現する。彼は、Glenn's に着いたとき Natty Bumppo に次の様にいう。

We are now fortified, garrisoned, and provisioned. . . and may set Montcalm

and his allies at defiance. How, now, my vigilant sentinel, can you see any thing of those you call the Iroquois on the main land? (50)

Duncan は、Glenn's の洞窟を敵から身を守る砦と見做している。彼は、Glenn's の洞窟に与えられている象徴的な意味を読み取れないのである。このような Duncan は、Glenn's の洞窟で啓示される Uncas を善意の人と見做すのである。彼は、完璧な肉体をした Uncas を見たとき次の様にいう。

This, certainly, is a rare and brilliant instance of those natural qualities, in which these peculiar people are said to excel. . . Let us then hope, that this Mohican may not disappoint our wishes, but prove, what his looks assert him to be, a brave and constant friend. (53)

Duncan は、Uncas を宗教的な意味を与えられた自然の体現者であることを認めている。彼は、Uncas をメシヤと見ている。しかし、Glenn's の洞窟を神聖な場所として理解できない Duncan は、Uncas に与えられているメシヤ性のもう一面を理解することができないのである。彼は、Uncas を悪の呪縛から解放し魂の負っている傷を癒し人間性を回復させることができるメシヤとして認識できないのである。彼は、終始一貫 Uncas を善意の人と見做しているのである。Duncan の Uncas に対する理解のしかたは、一面的なのである。彼は、合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰の信奉者なのである。⁽¹⁰⁾

Natty Bumppo は、Duncan の信じているキリスト教信仰に対しても批判的なのである。二人の対話に注目してみる。Duncan は、闇に覆われた森の中で不寝番をしてくれた

Natty Bumppo に感謝する。そして、今度は、彼が Natty Bumppo に代わって不寝番をすると申し出る。Natty Bumppo は、Duncan の提案を聞くと彼に次の様にいう。

If we lay among the white tents of the 60th, and in front of an enemy like the French, I could not ask for a better watchman. . . but in the darkness, and among the signs of the wilderness, your judgment would be like the folly of a child, and your vigilance thrown away. (128)

Natty Bumppo は、Duncan の判断力が敵・味方を識別する必要がある戦場では優れていることを認めている。しかし、戦場とは次元の異なる倫理的善・悪を識別するには不向きであることを見抜いているのである。彼は、悪の跳梁する闇の中で Duncan の知識人としての判断力が全く通用しないことを指摘しているのである。その上、彼は Duncan の善意に満ちた行為に対しても批判的である。激流に飲み込まれそうになっている Huron 族の男を助けようとする Duncan に Natty Bumppo は、“Would ye bring certain death upon us, by telling the Mingoes where we lie?” (69) と警告する。彼は、Duncan の善意がかえって全員の破滅をもたらすと批判しているのである。彼は、Duncan の博愛主義的行為が自己満足に過ぎないというのである。Natty Bumppo は、Duncan の合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰にも生命力を感じられないのである。

Natty Bumppo は、Glenn's の洞窟で語られているキリスト教信仰に魂を満たすものを感じられないばかりではない。彼は、Glenn's の洞窟で疎外感をも味わうのである。“the Royal Americans” (38) の少佐である

Duncan は、Natty Bumppo がイギリス軍の斥候であると分かると “If you serve with the troops of whom I judge you to be a scout, you should know such a regiment of the king as the 60th.” (38) という。彼は、Natty Bumppo が上官に対して敬意を払うべきであると高圧的にいうのだ。David は、“‘Haven,’ with the addition of the ‘new’ ” (17) と言われるところにいたことを誇らしげにいう。彼は、イェール大学を出た聖職者なのである。エリートである David は、一般信徒と一線を画して接するべきだと考えている。実際、彼は、Duncan に次の様にいう。

It is not prudent for one of my profession to be too familiar with those he has to instruct; for which reason, I follow not the line of the army; besides which, I conclude that a gentleman of your character, has the best judgment in matters of way-faring; I have therefore decided to join company, in order that the ride may be made agreeable, and partake of social communion. (24)

David は、権威をもって信徒を指導するべきだという。その上、彼は、エリートはエリートと旅をするのがいいという。Glenn's の洞窟を支配している雰囲気は、エリートを中心とした権威主義的なものなのである。このような雰囲気を醸し出している Glenn's の洞窟にきた Natty Bumppo は、正規の教育を受けたこともない一介の猟師で、今は、イギリス軍の斥候として働いている男なのである。彼は、エリートを中心とした Glenn's の洞窟で人間的な暖かい交わりを持ち得ないのである。Glenn's の洞窟に救いを求めてきた Natty Bumppo は、形骸化した信仰と権威主

義的な雰囲気に孤独感を深めるのである。こうして、彼は、Glenn's の洞窟を出る決意をするのである。

Natty Bumppo は、Glenn's の洞窟の中で聞いた超自然的な叫び声を契機にそこを出るのである。David が賛美歌を歌い夕拝を捧げている最中に “a cry, that seemed neither human, nor earthly” (59) が聞こえてくる。はじめ、Natty Bumppo は叫び声の性質が分からず自分が “only a vain and conceited mortal” (59) に過ぎないことを改めて思い知るのである。そして、彼は、叫び声について熟慮するのである。その結果、彼は、叫び声に象徴的な意味を読み取り次のようにいう。

He who makes strange sounds, and gives them out for man's information, alone knows our danger. I should think myself wicked unto rebellion against his will, was I to burrow with such warning in the air! Even the weak soul, who passes his days in singing, is stirred by the cry, and, as he says, is 'ready to go forth to the battle.' If 'twere only a battle, it would be a thing understood by us all, and easily managed; but I have heard that when such shrieks are atween heaven and 'arth, it betokens another sort of warfare! (62)

Natty Bumppo は、叫び声を霊的な戦いに備えよという神からの警告であると解釈する。そして、彼は、その警告を聞いて Glenn's の洞窟に留まることは神の意志に背くことだと考えるのである。Glenn's の洞窟に救いを求めてきた Natty Bumppo は、息苦しい洞窟を出て雄大な自然の中で霊的な戦いを続けよ

うとするのである。

Natty Bumppo と自然との係わりを考えると重要なのは、彼が鉄砲をもっていることである。鉄砲は、動物や人を殺傷する武器であるだけでなく象徴的な意味も与えられている。Natty Bumppo と Chingachgook の対話に注目してみる。Chingachgook は、インディアンの原始的な文明を “the stone-headed arrow of the warrior” (30) といい、インディアンを征服した白人の文明を “the leaden bullet” (30) と呼ぶ。高度に発達した白人の文明を支える精神は、科学的・合理的精神である。鉄砲は、白人の文明を支える科学的・合理的精神を象徴的に示している。このような精神を受け継いでいる Natty Bumppo は、Chingachgook に潮の満ち引きを次のように説明する。

They call this up-stream current the tide, which is a thing soon explained, and clear enough. Six hours the waters run in, and six hours they run out, and the reason is this; when there is higher water in the sea than in the river, they run in, until the river gets to be highest, and then it runs out again. (32)

Natty Bumppo は、潮の干満の現象を Newton の万有引力の法則を用いて説明している。彼は、自然を科学的・合理的に理解しているのである。

Natty Bumppo と自然の係わりは、射撃の腕を通してさらに示されている。射撃の腕は、鉄砲と同様に象徴的な意味が与えられている。Natty Bumppo と Uncas の対話に注目してみる。Natty Bumppo は、角の先端を除いて体全体が茂みに隠れている鹿の眉間を撃つという。しかも、彼は眉間の真ん中より

少し右よりを撃ち抜くという。彼は、見える部分から見えない部分を撃つというのだ。Uncas は、そんなことができるはずがないという。Natty Bumppo は、Uncas に答えて次の様にいう。

He's a boy! . . . Does he think when a hunter sees a part of the creatur, he can't tell where the rest of him should be! (34)

Natty Bumppo は、射撃の名手である猟師は一部を見て全体を把握できるというのである。射撃の腕は、自然に宗教的な啓示を読む能力を表している。彼は、自然を科学的・合理的に理解するだけでなくその背後に隠されている宗教的な意味をも読むのである。このような Natty Bumppo は、倫理的な闇に覆われた舞台への Uncas の出現を宗教的な意味を与えられた自然現象と受けとめるのである。彼は、Uncas の完璧な肉体・音楽的な声・鹿のような躍動的な行動力に宗教的な意味を与えられた自然の完全さ・美しさ・漲る生命力を読み取るのである。彼は、Uncas のメシヤ性を理解しているのである。

Natty Bumppo は、Uncas との係わりを深めていくのである。Duncan が彼を助けてくれた Uncas と握手するのを見て、Natty Bumppo は、次のようにいう。

Life is an obligation which friends often owe to each other in the wilderness. I dare say I may have served Uncas some such turn myself before now; and I very well remember, that he has stood between me and death five different times; three times from the Mingoes, once in crossing Horican, and— (73)

Natty Bumppo と Uncas は、助け合ってき

たのである。Natty Bumppo と Uncas は、さらに強く結ばれていく。Natty Bumppo は、Uncas に鉄砲の撃ち方を教えただけでなく自分の愛用の鉄砲を与えたのだ。だから、彼は、親が子供の言葉を理解するように鉄砲の音を聞けばそれが Uncas の撃ったものかどうかすぐに分かるのである。実際、彼は、鉄砲の音を聞いて次の様にいう。

There goes Uncas! . . . the boy bears a smart piece! I know its crack, as well as a father knows the language of his child, for I carried the gun myself until a better offered. (194)

Natty Bumppo と Uncas は、父と子の強い絆で結ばれているのである。Natty Bumppo は、Uncas のメシヤ性を理解しているばかりか親子の愛で結ばれている。

Natty Bumppo と Uncas の係わりは、物語の後半部でさらに描かれている。Uncas のメシヤ性は、物語の後半部で超自然的な枠組の中で描かれている。超自然的な枠組の核心部に Uncas の死が描かれている。Uncas の死に至る過程は、聖書のイエス・キリストの死に至る過程と重ね合わせて描かれている。Uncas の死は、イエス・キリストの十字架の死を連想させるのである。Uncas の死は、悪の呪縛から人間を解放し魂の負っている傷を癒し人間性を回復させる象徴的な意味が与えられているのである。こうして、Natty Bumppo と Uncas の係わりは、Natty Bumppo の超自然の世界に対する姿勢を通して描かれるのである。

超自然的世界に対する Natty Bumppo の姿勢は、彼が Duncan に与える忠告に示されている。彼は、せっかちな Duncan に次のように忠告している。

Young blood and hot blood, they say,

are much the same thing. We are not about to start on a squirrel hunt, or drive a deer into the Horican, but to outlie for days and nights, and to stretch across a wilderness where the feet of men seldom go, and where no bookish knowledge would carry you through, harmless. An Indian never starts on such an expedition without smoking over his council fire; and though a man of white blood, I honour their customs in this particular, seeing that they are deliberate and wise. We will, therefore, go back, and light our fire to night in the ruins of the old fort, and in the morning we shall be fresh, and ready to undertake our work like men, and not like babbling women, or eager boys. (189)

Natty Bumppo は、これからいく世界が理性や知識の通用しない世界であることを理解している。しかも、彼は、超自然の世界にゆくには Uncas や Chingachgook の助力を必要とするという。実際、彼は、Uncas や Chingachgook と council fire をもち彼等と徹底的に討論し彼等の支持を取りつけるのである。Natty Bumppo は、これからいく世界の性質を理解しているだけでなく、そこにいく心構えもできているのである。

Natty Bumppo の超自然の世界に対する姿勢は、彼の読解力にもみられる。超自然の世界の核心部に迫るには、そこに先入っていった人の残した印や足跡を丹念に拾いその意味をじっくり考える必要があるのだ。Natty Bumppo は、足跡から先人の置かれた状況や気持ちを読み取るのである。彼が Munro にいった言葉に注目してみる。

Munro は、娘たちが其処らで倒れているのでないかと心配する。Munro に対して Natty Bumppo は、次の様にいう。

Of that there is little cause of fear. . . this is a firm and straight, though a little step, and not over long. See, the heel has hardly touched the ground; and there the dark-hair has made a little jump, from root to root. No, no; my knowledge for it, neither of them was nigh fainting, hereaway. Now, the singer was beginning to be foot-sore and leg-weary, as is plain by his trail. There you see he slipped; here he has travelled wide, and tottered; and there, again, it looks as though he journeyed on snow-shoes. Ay, ay, a man who uses his throat altogether, can hardly give his legs a proper training! (217)

Natty Bumppo は、Munro の娘たちが元気であるという。逆に、彼は、David が疲れ切っているという。彼は、まるで目撃しているように読み取っているのである。実際、Cooper は、Natty Bumppo の読解力を次のように述べている。

From such undeniable testimony, did the practised woodsman arrive at the truth, with nearly as much certainty and precision, as if he had been a witness of all those events, which his ingenuity so easily elucidated. (217)

Natty Bumppo は、残された証拠から真理に迫る読解力を備えているのである。正確無比に象徴的な意味を読み取るのである。Uncas は、Cora Munro を悪の呪縛から解放するために死んだ。超自然的世界の核心部でこの先

例を読み取る Natty Bumppo は、悪に蝕まれている自分も Cora 同様に悪から解放されるという確信を得るのである。彼は、Uncas のメシヤ性を理解するのである。

Uncas の死は、Natty Bumppo と Chingachgook の関係を深めるのである。Natty Bumppo と Chingachgook は、共に Uncas の死を悲しむのである。Natty Bumppo は、Uncas を我が子のように愛していた。彼は、Uncas の死を悲しむのである。Chingachgook は、Uncas の父なのだ。彼は、血肉を分けた最愛のひとり息子 Uncas を失うのである。Natty Bumppo は、最愛のひとり息子を失った Chingachgook の悲しみの深さを十分に察することができないとしても彼の悲しみに少しは共感することができるのである。物語の最終章 33 章の Natty Bumppo と Chingachgook の対話に注目してみる。最愛のひとり息子を失った Chingachgook は、Uncas の亡骸を前に “I am alone—” (349) と孤独感と悲しみを表す。彼を “a yearning look” (349) を浮かべてみていた Natty Bumppo は、Chingachgook の言葉を聞くと込み上げてくる悲しみを押さえ切れず、次のようにいう。

no, Sagamore, not alone. The gifts of our colours may be different, but God has so placed us as to journey in the same path. I have no kin, and I may also say, like you, no people. He [Uncas] was your son, and a red skin by nature; and it may be, that your blood was nearer; —but if ever I forget the lad, who has so often fou't at my side in war, and slept at my side in peace, may He who made us all, whatever may be our colour or our gifts,

forget me. The boy has left us for a time, but, Sagamore, you are not alone! (349)

Natty Bumppo は、Uncas を失った悲しみは Chingachgook 一人が味わうのではないという。Natty Bumppo も Uncas の死を悲しんでいるのだ。Natty Bumppo は、Uncas の死を通して彼の父 Chingachgook の悲しみを共感するのである。Kay Seymour House は、Natty Bumppo を心の平静不動

に幸福を見いだすエピクロス主義者と解釈していた。しかし、闇の中で捉え直してみると、Natty Bumppo はメシヤ Uncas の死に心を揺すぶられるキリスト者と解釈することができるのである。Natty Bumppo は、Uncas の死を通して Chingachgook との絆を強めている。彼は、メシヤの父との和解を果たしているのである。彼は、救いを得たのである。救いを得た Natty Bumppo を描くことで、Cooper 自身が救いを得たと言えよう。

注

- (1) Kay Seymour House *Cooper's Americans* (Ohio State University Press, 1965) 287
- (2) James Fenimore Cooper *The Last of the Mohicans; A Narrative of 1775* (Albany: State University of New York Press, 1983) 本論中の作品からの引用は、全てこの版による。なお、() ないの数字は、そのページを示す。
- (3) Howard Mumford Jones *History and The Contemporary: Essays in Nineteenth-Century Literature* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1964) 72
- (4) Donald A. Ringe *The Pictorial Mode: Space and Time in the Arts of Bryant, Irving and Cooper* (Lexington: The University of Kentucky, 1971) 44
- (5) Thomas Philbrick "The Last of the Mohicans and the Sound of Discord" *American Literature*, 43 (1971) 31
- (6) James Franklin Beard "Afterword," *The Last of the Mohicans* (New York: New American Library, 1962) 424
- (7) James Franklin Beard ed. *The Letters and Journals of James Fenimore Cooper* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1960) I, 128
Henry Boynton *James Fenimore Cooper* (New York: Appleton-Century, 1931) 133-134
Robert Emmet Long *James Fenimore Cooper* (New York: A Frederick Ungar Book, 1990) 52
- (8) 拙論「時間の中心 Uncas—クーバーの描いたメシヤ像—」大阪女学院短期大学紀要19号 (1988) 87-103
- (9) 拙論「偽キリスト David Gamut」大阪女学院短期大学紀要 第24・25号 (1995) 89-98
- (10) 拙論「Duncan Heyward の挫折」大阪女学院短期大学紀要 第24・25号 (1995) 99-108